

---

# クリスマス イブ(前編)

YUKI & BOOH

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマス イブ（前編）

### 【著者名】

YUKI & BOON

### 【あらすじ】

一部作の前編です。俳優といつも自由がなく忙しい彼と、極々平凡なOの、微笑ましいクリスマスイブを、描いてみました。

駅を出て、イルミネーションに飾られた木々の下を、一人待ち合わせの場所まで歩いて行くと、正面に青く澄んだ海と真っ白いコテージが立ち並ぶ景色が見えてくる。そこはいつも私の大好きな場所、憧れの国ローマを思い出させててくれる。

ヨットハーバーの前に建つ白い3階建てのコロニアル風な建物が待ち合わせ場所。建物の中にはお洒落なアンティーク風の店がいくつか軒を連ね、いつも沢山の若者や家族連れで賑わっている。なかでも、可愛らしいサンタとトナカイをモチーフにしたオブジェばかりを扱っているお店に、心を奪われた。ゆっくりと見てみたいけど、そもそも行かない。

今の時期は、あちこちから流れてくるBGMも、煌くツリー やイルミネーションも、心が浮き立たずにはいられなくなる。

冷たいけど、清潔しい澄んだ空気と潮の香りが日常の煩わしさから一段と開放感を与えてくれる。

そう、今日はクリスマス イブ・・・彼と、二人で過ごそうと約束した日・・・

午後3時を回って、どこから訪れるのか人々の流れは絶える事が無い。

私は、冷えた手に息を吹きかけ、こすり合わせながら3階建ての建物の中に飛び入るようにして駆け込む。

華奢なアイアンの手摺が美しい階段をブーツのヒール音を早いリズムで響かせながら一気に3階まで駆け上がる。

オープンテラスの扉が開き、さつと潮風が頬を撫でてゆく。左右に立ち並ぶおしゃれな店の前の通路を通り過ぎると再び青い海が目の前に広がる。

イブなのに天気が良かつた今日は、午後の太陽の光が海に反射し瞬くように美しい。

店の後ろはバルコニー仕様になつた通路になつており、建物の中央に向かって進むと

ややひらけたパティオに出る。

白く広い石作りの階段が丁度、人が座れるようになつていて、人々は海を眺めたり、軽食をとったり ちょっとした憩いの場となつている。

そこは、まるで映画、『ローマの休日』を思わせるような風景だ。私も、ヒロインのオードリヘップバーンになつた様な気分で、下のパティオを見渡せるよう上の段に腰を下ろした。

約束の時間までは、もう少しはある。

行き交う人々の流れを眺めながら胸の中は弾んでいる。

バックから小さな鏡を取り出しては、ドレスアップした自分をチエックしてみたり・・・

なぜか落ち着かない・・・

もうすぐ彼に会える・・・

何処から現れるのかな・・・

この日のために、お洒落した私を見てなんて言つかな・・・

その瞬間を思つと、じっと座っているのも もぢかしい。

ふと、人の流れの中に見覚えのある顔が・・・。残念ながら彼ではない・・・

確か・・あの面影は?同じ大学のサークルの先輩だ。私の心の中に、胸の痛みが蘇つた・・・

思いを告げられねままの片思いだったから・・・。

まさかこんな処で?思わず彼の姿を田で追う。彼は偶然にも私から少し離れた前の段に座つた。

思わず『セ・ン・パ・イ』と可愛らしく声を掛けてしまった。

自分でも驚いている。先輩を好きだつた頃、思つてることの半分も話せなかつた、そんな私が・・・。

先輩が驚いたように振り返る。

私の顔を見ても思い出せずに怪訝な表情だつたが、名前を告げると目を丸くして笑つてくれた。ふたり並んで懐かしい昔話に花が咲く。こんな風に話せる時がくるなんて・・・先輩の事を一途に想つていた頃の幼い自分を思い出す。

でも今は、先輩を見てもドキドキときめく自分はいない。

先輩も彼女とクリスマスイブの待ち合わせをしていたようだつた。

嬉しかつた。先輩が幸せそうで・・・今は素直に心からそう思える。

時間を忘れて夢中で話していくとふと、せきからか突き刺さる視線を感じた。

パーティオの方からだつた。

さつきまで、待ちわびていた彼が立っていた。ドキリとして心臓の鼓動が早くなり、頬が赤く染まり、体中が震えはじめるのを感じた。慌ててバックから、鏡を取り出しても・・・チェックする余裕すらない。

彼は視線をそらし、立つたまま、バルコニーにもたれ、煙草を吸っている。

柔らかそうなベージュのセーターの前のジッパーは開き、下から濃い色のシャツが覗く。

くすんだ色合いのジーンズは彼の長い足を際立たせ、前で足を軽く交差させている。

一ソト帽にサングラスの彼の顔はこぢらを向いているようだが、目の表情までは分からない。

群衆に溶け込みながらも、はつと田を奪われる程、彼から滲み出る侵し難い雰囲気は人並みはずれている。

今日は特別な日、周りはみなドレスアップしてゐるのだが・・・

彼だけは、仕事柄のせいか、どんな服を着ても、モデルのようにスタイルがさまにしている。

彼の前を行過ぎるカツプルの中には、彼の方に顔を向けたまま なかなか前を向けないでいる女性達が居る。 そんな、光景は見慣れている・・・

私は、先輩に満面の笑顔を浮かべて軽い会釈をすると、白い石の階段を、彼のほうへ向かって弾むように駆け下りた。

先輩もまた、会釈をし、嬉しそうな笑顔の彼女を見て、こんなに見違えるほど彼女を美しくしたのは、奴だったのかと、軽くこぶしに力が入るのを感じた。

・・・・・「めんね待たせて・・何時からいたの?

彼は短い挨拶で応える。

嬉しそうに話す私の質問には答えず、無言で長い息をつくように元氣よく吐き出す。

急ぐようにパーティオから離れると通路を歩き出す。早足だ。そのまま地上へ出る階段を駆け下りてゆく。

私は慎重に階段にブーツのヒールを運びながらも彼の後を必死で追つた。

何処へ?何があったの?・怒ってるの?

いつもやつ・・・

何も答えてはくれない。

私は、沈み行く太陽と、先ほどよりもっと色鮮やかに瞬き始めたイルミネーションを、樂しみながら手を繋いで欲しかったのに・・・

ちょっと立ち止まつてスネて見せた。

やつぱり待つてはくれない・・・

仕事で疲れてるのかな・・・前より少しあせたみたい。

不安な気持ちを抑えつつ、彼を追つて付いて行くと、クルーザーや豪華客船の停泊するハーバーに着いた。

彼は海の際にある手摺まで歩くと腕をもたせかける。

再び煙草を取り出し両手で煙草を囲むように火を点ける。

なんて、カッコいいんだろ・・・タバコの匂い、嫌いなはずなのに・・・

なぜか、あなたのその姿を、見ているだけで全てを許してしまったくなる。

吐き出された煙はすぐに潮風にさらわれ彼の前を勢い良く流れてゆ

$\leftarrow_{\circ}$

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2460d/>

クリスマス イブ(前編)

2011年2月1日04時06分発行